これからの鉄道ビジネスの在り方
――阪神電気鉄道の事業から学ぶ強固な鉄道ビジネスの実現――

社会学部現代社会学科　2022013
指導教員　大塚　良治
氏名　榎本　一輝

要旨

本論文では阪神電気鉄道を概要・路線網・競合各社を含めた考察・自社での強みの各視点から分析した上で、今後の鉄道経営の在り方を述べていく。研究を行っていく背景には 2020 年以降のコロナ禍による各鉄道会社の業績不振および昨今の赤字線区の公表、資金不足による鉄道運行上の重大インシデントの発生が挙げられる。鉄道事業を再生していく中で、地元負担での鉄道運営も選択肢として検討されつつあるが、本論文では「どのようにすれば内部補助が成立するか」「内部補助を成立させるうえで重要なことは何か」という面でその上で競合相手が多く不利な状況に立たされていると考えた阪神電気鉄道を研究対象とし、路線が短く競争において不利でもなぜ鉄道サービスの質が高いのか、そのという問いを設定し、阪神電気鉄道が発行している広報誌による文献調査を主とし、実際に阪神電気鉄道・近畿日本鉄道・山陽電気鉄道に乗車するなどのフィールドワークを通じて、各列車における運行パターンや乗降および乗り換え時の人流などを踏まえて分析している。

序論では、コロナ禍以降の鉄道に関して考察している。地方自治体の主張の双方の主張を分析している。そして、現状のような内部補助の影響がどのような形で出ると考えられるか、ローカル線を始めとする赤字線区と鉄道事故・インシデントの側面から考察している。その上で、鉄道経営を考えるにあたって阪神電気鉄道を調査対象とした理由を述べている。

第一章では、阪神電気鉄道に関する概要として、阪神電気鉄道と阪急阪神ホールディングスについて整理したのち、阪神が阪急阪神ホールディングスの完全子会社になった経緯を分析している。後に阪神電気鉄道の他に直通先である山陽電気鉄道や近畿日本鉄道および並走する阪急神戸線や JR 東海道本線も視野に入れ、「ネットワーク」「競争」という観点で考察する。

第二章では、阪神電気鉄道における強みを分析している。今回は阪神電気鉄道における斬新な施策として、「千鳥停車」「プロ野球」「高架下活用」と 3 つの節に分け、その強みが阪神電気鉄道のどの特徴を活かしたものになっているかを分析している。

終章では、周囲の鉄道事業者はもちろん、都市部の地方自治体も赤字線区の維持にどのように貢献すれば良いか考察している。